

原稿 正本 百四十四

使徒ヨハネ第一書

第一章一

はじめ 太初より有りし所のもの、我らが聞きしところ、目にて  
見し所、つらゝ視て手觸りし所のもの、即ち生命の言につ  
きて、この生命すでに顕れ、我ら之を見て證をなし、其  
の曾て父と偕に在して今われらに顕れ給へる永遠の生命  
を汝らに告ぐ――我らの見しところ、聞きし所を汝らに  
告ぐ、これ汝らをも我らの交際に與らしめん為なり。我らは  
父および其の子イエス・キリストの交際に與るなり。此等  
のことを書き贈るは、我らの喜悦の満ちん為なり。  
我らが彼より聞きて、また汝らに告ぐる音信は是なり、

聖書改譯原稿用紙

即ち神は光にして少しの暗き所なし。もし神と交際あり  
と言ひて暗き中を歩まば、我ら偽りて真理を行はざるなり。  
もし神の光の中に在すとく、我の中を歩まば、我ら互に  
交際を得、また其の子イエスの血すべての罪より我らを潔  
む。もし罪なしと言はば、是みづから欺けるにて真理われ  
らの中になし。もし己の罪を言ひあらはさば、神は眞實に  
して正しければ、我らの罪を赦し、凡ての不義より我らを潔  
め給はん。もし罪を犯したる事なしといはば、これ神を偽  
者とするなり、神の言われらの中になし。

第二章

一 わが若子よ、これらの事を書き贈るは、汝らが罪を犯さ  
ざらん為なり。人もし罪を犯さば、我等のために父の前に助  
主あり。即ち義なるイエスキリストなり。彼は我らの罪の  
為に膏の供物たり。壺に我らの為のみならず、また全世界の  
為なり。我らその誠命を守らば、之によりて、彼を知ること  
を自ら悟る。『われ彼を知ると言ひて其の誠命を守らば、  
偽者にして真理その表になし。その御言を守る者は誠  
に神の愛、その表に全うせらる。之によりて我ら彼に在るこ  
とを悟る。彼に居ると言ふ者は、彼の歩み給ひし如く自ら

聖書改譯原稿用紙

歩むべきなり。  
愛する者よ、我が汝らに書き贈るは、新しき誠命にあ  
らず。汝らが始より有てゐる舊き誠命なり。この舊き誠命は、汝ら  
が聞きし所の言なり。然れど我が汝らに書き贈る所は、ま  
た新しき誠命にして、主にも汝らにも真なり。その故は、真の  
光すでに照りて、暗黒はやに過ぎ去ればなり。光に在り  
と言ひて其の兄弟を憎むものは、今もなほ暗にあるなり。  
その兄弟を愛する者は、光に居りて、顛躓その表になし。そ  
の兄弟を憎む者は、暗黒にあり、暗き中を歩みて、己が行く所  
を知らず、これ暗黒はその眼を瞤ましたればなり。

三 若子よ我この書を汝らに贈るは汝ら主の御名により  
 罪を赦されたるに因る。父たちよ我この書を汝らに贈  
 るは汝ら太初より在す者を知りたるに因る。愚き者よ我こ  
 の書を汝らに贈るは汝ら愚しき者に勝ちたるに因る。子  
 供よ我この書を汝らに贈りたるは汝ら御父を知りたるに  
 因る。父たちよ我この書を汝らに贈りたるは汝ら太初より  
 在す者を知りたるに因る。若き者よ我この書を汝らに贈り  
 たるは汝ら強くかつ神の言その表に留りまた愚しき者に  
 勝ちたるに因る。汝ら世をも世にある物をも愛する人  
 し世を愛せぬ御父を愛する愛その表になし。凡そ世にあ

聖書改譯原稿用紙

るもの即ち肉の慾眼の慾所有の誇などは御父より出づる  
 にあらず世より出づるなり。世と世の慾とは過ぎ往く然  
 れど神の御靈を行ふ者は永遠に存るなり。  
 子供よ今は末の時なり汝らが非キリストきたらんと  
 聞きし如く今や非キリストおほく起れり之によりて我等  
 その末の時なるを知る。彼らは我らより出でゆきたれど  
 我より我等のものにあらず。我等のものならば我らと  
 共に留まりしならん。然れどその出でゆきしは皆われらの  
 由のならぬことを預れんためなり。汝らは聖なる者より  
 膏を注がれたれば凡ての事を知る。我この書を汝らに贈

三

るは汝ら真理を知らぬ故にあらざる真理を知り、かつ凡ての  
虚偽の真理より出でぬことを知るに因る。偽者は誰な

三

るかイエスのキリストなるを否む者にあらずや。御父と御  
子とを否む者は非キリストなり。凡そ御子を否む者は御

三

父をも有たず、御子を言ひ表す者は御父をも有つなり。始

五

より聞きしところを汝らも御子と御父とに居らん。我ら

天

に約し給ひし約束はこれあり、即ち永遠の生命なり。汝

モ

らを惑す者どもにつきて我これらの事を書き贈る。汝ら

の表には主より汝がれたる膏とびまる故に人の汝らに物

を教ふる要なし。此の膏は汝らに凡ての事を教へ、且つ真に

聖書改譯原稿用紙

元

一して虚偽なし。汝等は其の教へしごとく主に居るなり。さ

れば若子よ、主に居れ。これ主の現れ給ふときに臆すること

元

なく、其の來り給ふときに恥づることなからん為なり。汝

ら主を正しと知らば、凡て正義を行ふ者の主より生れたる

ことを知らん。

希望

聖書改譯原稿用紙

一 視よ、父の我らに賜ひし愛の如何に大なるかを、我ら神  
の子と稱へらる。既に神の子たり。世の我らを知らぬは、父を  
知らぬによりてなり。愛する者よ、我ら今神の子たり、後い  
かん、未だ顯れず。主の現れ給ふ時われら之に肖んことを知  
る。我らその真の状を見るべければなり。凡て主により此の  
望を懷く者は、その清きが如く己を潔くす。凡て罪を行ふ  
者は不法を行ふなり。罪は即ち不法なり。汝らは知る、主の  
現れ給ひしは罪を除かん為なるを、主には罪あることなし。  
凡そ主に居る者は罪を犯さず、凡そ罪を犯す者は未だ主  
を見ず、主を識らぬなり。若子よ、人に惑さるな、義を行ふ者  
は義人なり、即ち主の義なるが如し。罪を行ふ者は悪魔よ  
り出づ、悪魔は始より罪を犯せばなり。神の子の現れ給ひし  
は、悪魔の業を毀たん為なり。凡て神より生る者は罪を  
行はず、神の種々の表に止まるに由る。彼は神より生る故に  
罪を犯すこと能はず。之に由りて神の子と悪魔の子とは  
明かなり、凡そ義を行はぬ者および己が兄弟を愛せぬ者は  
神より出づるにあらず。われら互に相愛すべきは、汝らが  
始より聞きし者信なり。カインに倣ふな、彼は惡しき者よ  
り出で、己が兄弟を殺せり。何故こゝしたるが己が行爲は

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

悪しくその兄弟の行為は正しかりしに因る。

兄弟よ、世は汝らを悪むとも怪しむな。われら兄弟を

愛するによりて、死より生命に移りしを知る、愛せぬ者は死

のうちに居る。凡そ兄弟を惡む者は即ち人を殺す者なり、

凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命なきを汝らは知る。

主は我らの為に生命を捨て給へり、之に因りて愛といふ

ことを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべき

なり。世の財寶をもちて兄弟の窮乏を見、かへつて憐憫の

心を閉づる者は、何で神の愛その表にあらんや。若子よ、我

ら言と名とをもて相愛することなく、行為と眞實とをもて

爲べし。之に由りて我ら眞實より出でるを知り、且われら

の心われらを責むるとも神の前に心を安んずべし。神は

我らの心よりも大にして一切の事を知り給へばなり。愛

する者よ、我らが心みづから責むる所なくば、神に向ひて懼

れなし。且すべて求むる所を神より受くべし。是の誠命

を守りて御心にかなふ所を行へばなり。その誠命はこれ

なり、即ち我ら神の子イエスキリストの名を信じ、その命に

給ひし如く互に相愛すべきことなり。神の誠命を守る者

は神に居り、神もまた彼に居給ふわれらその賜ふ所の御靈

によりて其の我らに居給ふことを知るなり。

聖書改譯原稿用紙

第四章

聖霊は既に

- 一 愛する者よ、凡ての霊を信ずな。その霊の神より出づるや、  
二 否やを試みよ。多くの偽預言者世に出でたればなり。凡  
そイエス・キリストの肉體にて来り給ひしことを言ひ表は  
す霊は神より出づ。汝ら之によりて神の御霊を知るべし。  
三 凡そイエスを言ひ表はさぬ霊は神より出でしにあらず。こ  
れは非キリストの霊なり。その来ることは汝ら聞けり。この  
四 霊すでに世にあり。若子よ、汝らは神より出でし者にし  
て既に彼らに勝てり。汝らに居給ふ者は世に居る者よりも  
五 大なればなり。彼らは世より出でし者なり。之に由りて世  
六 の事を語り、世も亦かれらに聴く。我らは神より出でし者  
なり。神を知る者は我らに聴き、神より出でぬ者は我らに聴  
かず。之に由りて真理の霊と迷謬の霊とを知る。  
七 愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ。凡  
そ愛ある者は神より生れ、神を知るなり。愛なき者は神を  
九 知らず。神は愛なればなり。神の愛われらに預れたり。神は  
十 命を得しめ給ふに因る。愛といふは、我ら神を愛せしにあ  
らず。神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥  
十一 の供物となし給ひし是なり。愛する者よ、斯のごとく神を

聖書改譯原稿用紙

異本「愛せしめて  
未だ見ぬ神を  
愛せんや」とあり

十三

れらを受<sup>あい</sup>し給<sup>たま</sup>ひたれば、我<sup>われ</sup>らも亦<sup>また</sup>たがひに相<sup>あひ</sup>愛<sup>あい</sup>すべし。

十四

未<sup>いま</sup>だ神<sup>かみ</sup>を見<sup>み</sup>し者<sup>もの</sup>あらず。我<sup>われ</sup>らもし互<sup>たがひ</sup>に相<sup>あひ</sup>愛<sup>あい</sup>せば、神<sup>かみ</sup>われらに

十五

在<sup>いま</sup>し、その愛<sup>あい</sup>も亦<sup>また</sup>われらに全<sup>まこと</sup>うせらる。神<sup>かみ</sup>みたまを賜<sup>たま</sup>ひし

十六

に因<sup>よ</sup>りて我<sup>われ</sup>ら神<sup>かみ</sup>に居<sup>を</sup>り、神<sup>かみ</sup>われらに居<sup>を</sup>給<sup>たま</sup>ふことを知<sup>し</sup>る。又<sup>また</sup>

十七

われら父<sup>ちち</sup>のその子<sup>こ</sup>を遣<sup>つかは</sup>して世<sup>よ</sup>の救<sup>すく</sup>主<sup>み</sup>となし給<sup>たま</sup>ひしを見て

十八

その證<sup>あかし</sup>をなすあり。凡<sup>およ</sup>そイエスを神<sup>かみ</sup>の子<sup>こ</sup>と言<sup>い</sup>ひあらはす

十九

者<sup>もの</sup>は神<sup>かみ</sup>かれに居<sup>を</sup>り、かれ神<sup>かみ</sup>に居<sup>を</sup>る。我<sup>われ</sup>らに對<sup>たい</sup>する神<sup>かみ</sup>の愛<sup>あい</sup>を

二十

我<sup>われ</sup>ら既<sup>すで</sup>に知<sup>し</sup>り、かつ信<sup>しん</sup>ず。神<sup>かみ</sup>は愛<sup>あい</sup>なり、愛<sup>あい</sup>に居<sup>を</sup>る者<sup>もの</sup>は神<sup>かみ</sup>に

居<sup>を</sup>り、神<sup>かみ</sup>も亦<sup>また</sup>かれに居<sup>を</sup>給<sup>たま</sup>ふ。斯<sup>か</sup>く我<sup>われ</sup>らの愛<sup>あい</sup>完全<sup>かんぜん</sup>を得<sup>え</sup>て審<sup>しん</sup>判<sup>はん</sup>

聖書改譯原稿用紙

二十一

因<sup>よ</sup>る。愛<sup>あい</sup>には懼<sup>おそ</sup>れなし。全<sup>まこと</sup>き愛<sup>あい</sup>は懼<sup>おそ</sup>れを除<sup>のぞ</sup>く懼<sup>おそ</sup>れには苦<sup>くるしみ</sup>痛<sup>いた</sup>みあれば

二十二

あり。懼<sup>おそ</sup>る者<sup>もの</sup>は愛<sup>あい</sup>いまだ全<sup>まこと</sup>からず。我<sup>われ</sup>らの愛<sup>あい</sup>するは、神<sup>かみ</sup>ま

二十三

づ我<sup>われ</sup>らを受<sup>あい</sup>し給<sup>たま</sup>ふによる。人<sup>ひと</sup>もし「われ神<sup>かみ</sup>を受<sup>あい</sup>す」と言<sup>い</sup>ひて

二十四

その兄<sup>あやうだい</sup>弟<sup>てい</sup>を惡<sup>にく</sup>まば、これ偽<sup>いつはりもの</sup>者<sup>もの</sup>なり。既<sup>すで</sup>に見<sup>み</sup>るところの兄<sup>あやうだい</sup>弟<sup>てい</sup>を

二十五

愛<sup>あい</sup>せぬ者<sup>もの</sup>は未<sup>いま</sup>だ見<sup>み</sup>ぬ神<sup>かみ</sup>を受<sup>あい</sup>すること能<sup>あた</sup>はず。神<sup>かみ</sup>を受<sup>あい</sup>する

者<sup>もの</sup>は亦<sup>また</sup>その兄<sup>あやうだい</sup>弟<sup>てい</sup>をも愛<sup>あい</sup>すべし。我<sup>われ</sup>らこの誠<sup>いしめ</sup>命<sup>めい</sup>を神<sup>かみ</sup>より受<sup>う</sup>け

たり。